

〈研究ノート〉

## *The Prisoner of Chillon*における「牢獄」－変容した主人公－<sup>1)</sup>

The Study of the Dungeon Image in *The Prisoner of Chillon* by Lord Byron

－ On the Psychological Changes of the Hero －

中村 博文<sup>1)</sup>

### 要 旨

シヨン城はスイスのレマン湖畔の名城として、世界的な観光スポットである。かつてこの城内地下に、プロテスタントの闘士として自己の信念をあくまで貫き通そうとしたが故に幽閉されたBonivardと言う人物がいた。1816年詩人Shelley達とともにこの地を訪れた作者Byronは、このエピソードから*The Prisoner of Chillon*を書き上げたと言われている。牢獄で肉体を極度に拘束された自由人の魂は、あくまで自由を求め闘い続ける。このテーマを、作者はどのように受け止め自身の作品に反映させたのか。ここには、Shelleyとは一味違うByron独特の「裏ワザ」めいたものさえ感じられる。

キーワード：英語，英文学，歴史，自然，環境

English, Literature, History, Nature, Ecology

### 序

Byron作*The Prisoner of Chillon* (1816年) 冒頭には、次のようなソネットが置かれている。

ETERNAL spirit of the chainless mind!  
Brightest in dungeons, Liberty! Thou art,  
For there thy habitation is the heart—  
The heart which love of thee alone can bind;  
And when thy sons to fetters are con-signed—  
To fetters, and the damp vault's day-less  
gloom,

Their country conquers with their martyrdom,  
And Freedom's fame finds wings on every wind.

Chillon! Thy prison is a holy place,  
And thy sad floor an altar—for 'twas trod,  
Until his very steps have left a trace  
Worn, as if thy cold pavement were a sod,  
By Bonivard!—May none those marks efface!  
For they appeal from tyranny to God.<sup>2)</sup>

肉体は牢獄に繋がれ不自由極まりないが、精神を鎖で束縛することは不可能であり、永遠に自由な魂を謳歌するかのようこのソネットは始まる。自由の闘士が囚われの身となり、投獄され足枷をかけられている。この殉教者の如き犠牲により、自由の名声はますます高まり、あまねく知れ渡る。Chillonの牢獄そのものは、薄暗く湿気も高く、その中に幽閉されている囚人は悲惨な日々を送り続けているにもかかわらず、彼の惨めな境遇こそ自由の栄光を益々高めるものであり、神の世界へと至る永遠性を帯びている。

このソネットを読む限り、それはいかなる圧政の下でも損なわれることのない精神の自由を鼓舞する内容である。実際Chillonの牢獄に幽閉されていたのはFrançois Bonivard (1493～1570) と言う人物で、彼は高位の聖職者兼歴史家でもあった<sup>3)</sup>。またプロテスタントの宗教改革者の一人として愛国的かつ献身的であった故に、Duke of Savoyに捕らえられChillon城に幽閉される結果となった。作品冒頭のソネットは一見、そのような不屈の闘志を抱く人物の、長きにわたる牢獄での孤独な闘いと、最終的

1 Hirofumi NAKAMURA 教養教育センター

受理日：2014年10月15日

に鎖の束縛から解放されるといういわば祝祭的なムードを示唆していると思える。

にもかかわらず、巻末でこの主人公は“even I/Regain'd my freedom with a sigh.” (ll. 393-4)と述べ、あたかも不本意ながら自由の身となったかのようである。本稿では、牢獄内の主人公の内面を、彼を取り巻く自然などと比較しつつ詳しく探ってみたい。

## I

主人公がただ一人繋がれているChillonの牢獄内部は以下のように描かれている。

There are seven pillars of gothic mold,  
In Chillon's dungeons deep and old,  
There are seven columns, massy and grey,  
Dim with a dull imprisoned ray,  
A sunbeam which hath lost its way,  
And through the crevice and the cleft  
Of the thick wall is fallen and left;  
Creeping o'er the floor so damp,  
Like a marsh's meteor lamp: (ll. 27-35)

牢獄内にはゴシック風の7本の円柱が立っており、壁の亀裂から辛うじて太陽光が差し込むにすぎず、牢内部は薄暗い。あたかも、彷徨いこんできた太陽光は、そこで閉じ込められたようであり(“a dull imprisoned ray”)、それは夜道を急ぐ旅人を幻惑するignis fatuusを連想させ、大変不気味な雰囲気醸し出す。無論、自然光の新鮮さは見いだせない。続いて、

And in each pillar there is a ring,  
And in each ring there is a chain;  
That iron is a cankering thing,  
For in these limbs its teeth remain,  
With marks that will not wear away, (ll. 36-40)

と述べられているが、7本の円柱それぞれには鎖に取りつけられた環状の金具があり、主人公も長年それに繋がれているため手足に食い込んだ跡形は容易に消えない。

Bonnivardは元来父親を含め7人家族だった<sup>4)</sup>。しかし今は、牢に繋がれた主人公ただ一人となっ

てしまった。“We were seven — who now are one,” (l. 17)と彼は述べているが、これはW. Wordsworthの*We were seven*を想起させ大変興味深い。Wordsworthのこの作品では、姉と兄が既に故人となっており、5人が生存しているに過ぎないにもかかわらず、少女は自分たちが7人だと言ってみない。

上記の引用に続きBonnivardは、

Six in youth, and one in age,  
Finish'd as they had begun,  
Proud of Persecution's rage;  
One in fire, and two in field, (ll. 18-21)

と述べる。7人のうち1人は年老いていたと言うが、これは彼らの父親であり、“Dying as their father died, /For the God their foes denied;” (ll. 23-4)と言う表現から、父親は自らの信念を最後まで貫き通した挙句死を選んだようである。そしてこの信念は、息子たちにも忠実に受け継がれ、息子のうち3人は戦場で潔く果てた (l. 21)。残り3人の息子はChillon城に投獄され、今では主人公のみが辛うじて生存している。

かつての牢内で、3人は一人ずつ別々に石柱に繋がれており (l. 48)、一歩も動けないためお互いに近寄れず、おまけに牢内に辛うじて差し込む“pale and livid light” (l. 52)のため、お互いの姿はあたかも“strangers” (l. 53)の如くに思えた。同じ牢内にこの3人が繋がれているにもかかわらず、鎖のために相互に触れ合えないが、それだけ益々精神的な結束力は高まる(“Fettered in hand, but joined in heart;” l. 55)。このように生気が失せた墓場のような牢内では(“in the dearth/Of the pure elements of earth,” ll. 56-7)互いに希望を持たせるような話や、いにしへの伝説、武勇の歌に耳を傾けることは慰めになっていた (ll. 56-61)。しかし、やがて牢獄の石壁にこだまする声からはかつての豊かな音量もおおらかさも消え失せ、あたかも他人の声のように聞こえるようになってきた (ll. 62-8)。幽閉されていた囚人からは生気が失われ、死の世界と化した牢獄と次第に同化し、彼らの人間性がなくなり単なる物質同然になり下がったのだろうか。

3人の長男であるBonnivardは、同じく投獄されている2人の弟を見守り、激励しなければならない (ll. 69-71)。一番下の弟について、Bonnivardは以

下のように述べる。

The youngest, whom my father loved,  
Because our mother's brow was given  
To him—with eyes as blue as heaven,  
For him my soul was sorely moved;  
And truly might it be distressed  
To see such bird in such a nest;  
For he was beautiful as day—  
(When day was beautiful to me  
As to young eagles, being free) — (ll. 73-81)

母親似で目は蒼穹の如く碧い彼は、父親からも寵愛を受けており、主人公も深く感動して眺めていたようだ。このようなむさ苦しい牢獄は彼には場違いな場所であり、それをBonnivardは“such bird in such a nest”と表現する。Byronの大作*Don Juan* Canto Vで、奴隷の身分で女装させられ、名前もJuannaと女性形に変えられた主人公は、サルタンの女王Gulbeyazの面前に引き立てられてくる。女王は主人公に寄り掛かり彼に抱かれようとする(st. 125)。だがその際、Juanは彼女の腕を振りほどき“The prison'd eagle will not pair, nor I/Serve a sultata's sensual phantasy.”(126, ll. 7-8)<sup>5)</sup>と述べ、毅然とした態度を示す。彼は目下奴隷の身分であり、それを“The prison'd eagle”に喩えたのであろうが、*The Prisoner of Chillon*でも白日の下天空を自由に飛び交うyoung eaglesのイメージは、薄暗闇に閉ざされた牢獄とは相いれないことは明白である。更に、弟の目は“eyes as blue as heaven”の如きであり、“he was beautiful as day”だから、弟は健全な太陽光をシンボライズしたような存在で、彼にとって牢獄は全く場違いな場所であった。

eagleはByronの作品中にしばしば登場し、ある時にはその猛禽としての獷猛さをイメージさせることもある。たとえば*Manfred* I, iiで、雄大なAlpsの山々に向かいJungfrauの断崖上に一人佇む主人公の面前を、一羽のeagleが天上に向かって飛翔する(ll. 29-36)。そのeagleに向かい彼は、“I should be/Thy prey, and gorge thine eaglets;”(ll. 32-3)<sup>6)</sup>と述べ、自らを餌食にしてくれるように懇願する。Astarteとの一件で苦しみ続けnegativeなムードの*Manfred*は、肉食性のeagleに自身が食われ抹殺されたいかのようだ。

さて、Bonnivardの二番目の弟は、

The other was as pure of mind,  
But formed to combat with his kind;  
Strong in his frame, and of a mood  
Which 'gainst the world in war had stood,  
And perish'd in the foremost rank  
With joy:  
(ll. 92-7)

と言う表現から、より戦に向いた体格であったようだが、上の弟同様純粋な魂を持ち正義を盾として毅然とした態度を維持して先陣で戦った。だが捕らえられ牢獄に繋がれてからは、次第に意気消沈し続けた。その弟は生前狩猟を得意としていたようで、山野で鹿や狼を追い回すことが常であった彼には、牢に幽閉され自身が捕獲された獲物のようになったことは耐えられないほどの苦痛であったに違いない。

三人が投獄されていたChillon城はどのような場所に建っているのか見てみよう。

Lake Lemman lies by Chillon's walls:  
A thousand feet in depth below  
Its massy waters meet and flow;  
Thus much the fathom-line was sent  
From Chillon's snow-white battlement,  
Which round about the wave enthralls:  
(ll. 107-12)

城壁を取り囲むかのようにLeman湖の湖水が押し寄せ、その水深は千フィートもあるという<sup>7)</sup>。湖底では水量豊かに湖水が流動している。頑丈な城壁と湖水により、牢獄はいわば二重に取り巻かれていて(“A double dungeon wall and wave/Have made”(ll. 113-4)、まさしくそこは“a living grave”(l. 114)である。更に牢獄は水面より低い位置にあり、波が打ち寄せる音は頭上から聞こえてくる(ll. 115-8)。厳冬期には波風が強く、牢獄の鉄格子から波しぶきが飛び込んできたようで(ll. 119-21)、恐らく牢内は湿気が高く病的な環境であったと思える。Bonnivardは、“I could have smiled to see/The death that would have set me free.”(ll. 124-5)と、敢えて死を受け入れようとするかのようだが、こんな生気が失せた劣悪な条件の下では、人は生に対する執着を失い死さえも厭わなくなる。“We were used to hunter's fare”(l. 130)と述べる主人公同様、彼の弟も“The range of the steep mountain's side”

(l. 143) を自在に駆け巡る自由人であったため、自由を極端なまでに束縛された牢獄での生活により生に対する執着が薄らいでいき、やがては死を待ち望む以外になくなる。果たせるかな、二人の弟は憔悴し死を迎える。その亡骸は牢獄内で二人が鎖で繋がれていた場所に埋葬された。

二人目の弟が牢獄内で衰弱死する際の様子を見よう。今際の際にその弟は、

And then the sighs he would suppress  
Of fainting nature's feebleness,  
More slowly drawn, grew less and less:  
I listened, but I could not hear— (ll. 202-5)

と述べられているように吐息が徐々に弱まりついに息絶えてしまった。鎖で繋がれていたBonnivardは、“one strong bound”(l. 210)で鎖を引きちぎり駆け寄るが、もはや弟は身罷っていた (l. 211)。

I only stirr'd in this black spot,  
I only lived—I only drew  
The accursed breath of dungeon-dew;  
(ll. 212-4)

もはや牢獄内にはBonnivard以外の生きた姿の人間は存在せず、ここで三回繰り返される“*I only*”と言う表現は、主人公の寄る辺なき孤独感をいや増すのに極めて効果的である。生気が失せた牢獄でただ一人生き続けるBonnivardは、もはや「生ける屍」同然である。ここで主人公は身罷ったばかりの弟の冷えた手を取り、自分の手も同じくらい冷たくなっていると述べる (“I took that hand which lay so still, /Alas! My own was full as chill;” ll. 221-2)。この部分を同作者の*Manfred*巻末と比較するのは大変興味深い。第3幕4場で今際のManfredがAbbotの手を求めるとき、Abbotは“Cold—cold—even to the heart—”(l. 149)と述べる。Manfredも長きにわたる懊悩に苦しめられ、death-in-lifeの状態で生き続けてきたのだろう。それ故彼は、“’tis not so difficult to die.”と断言できた<sup>8)</sup>。

Bonnivardは、“I had not strength to stir, or strive, /But felt that I was still alive—”(ll. 223-4)と続けて述べ、最愛かつ牢獄内のただ一人の生ある相手を失い、もはや何一つ生きるための目的がなく生き続けることは苦しみを増すだけであるかのよう

である。にもかかわらず“I could not die,”(l. 228)と告白し、それは“faith”(l. 229)を抱き続けているためだと言う。作品冒頭のsonnetで謳歌されている“ETERNAL spirit of the chainless mind”を、Bonnivardは依然として失っていなかったと思える。

その後主人公の心中には、変化が生じる。その様子を辿ってみよう。

What next befell me then and there  
I know not well—I never knew—  
First came the loss of light, and air,  
And then of darkness too:  
I had no thought, no feeling—none—  
Among the stones I stood a stone,  
And was, scarce conscious what I wist,  
As shrubless crags within the mist;  
For all was blank, and bleak, and grey,  
It was not night—it was not day,  
It was not even the dungeon-light,  
So hateful to my heavy sight,  
But vacancy absorbing space,  
And fixedness—without a place; (ll. 231-44)

最初に光と空気そして闇が消滅した。思考も感情もなくなった主人公は、石造りの牢獄の中で石のようになってしまった。周囲は夜でも昼間でもない状態で、ただ空虚が空間全体に広がり、全体は固まってしまったかのようだ。続いて主人公は、

There were no stars—no earth—no time—  
No check—no change—no good—no crime—  
But silence, and a stirless breath  
Which neither was of life nor death;  
A sea of stagnant idleness,  
Blind, boundless, mute, and motionless!  
(ll. 245-50)

と述べている。彼の周囲は、昼と夜の区別がない太古の宇宙、あるいは闇から光が生まれ、個別の星、時間、善悪が生まれる以前のChaosをイメージさせる。

Byronの*Mazeppa*では、疾走する荒馬に縛りつけられ艱難辛苦の憂き目に遭う主人公は、やがて野生馬の生息する世界にたどり着き、彼を背中にしぼり



つけたままその馬は死んでしまう。夥しい数の野生馬によりその二人は出迎えを受けるが、野生馬の群れは彼らを置き去りにする。死んだ馬に縛られた主人公は、大自然の中にただ一人取り残され、救出も絶望的であることを悟ったようで、

The dying on the dead!  
I little deem'd another day  
Would see my houseless, helpless head.  
(Mazeppa, ll. 715-7)<sup>9)</sup>

と述べる。折しも時刻は日没のころで、彼はDeathに言及しつつ

To-morrow would have given him [Death] power  
To rule, to shine, to smite, to save—  
And must it [to-morrow] dawn upon his grave?  
(Mazeppa, ll. 760-2)

と、翌日は自身をDeathの手に委ねることも吝かではない。朦朧とした意識の中で彼は、

I know no more—my latest dream  
Is something of a lovely star  
Which fix'd my dull eyes from afar,  
And went and came with wandering beam,  
And of the cold, dull, swimming, dense  
Sensation of recurring sense,  
And then subsiding back to death,  
And then again a little breath,  
A little thrill, a short suspense,  
An icy sickness curdling o'er  
My heart, and sparks that cross'd my brain—  
A gasp, a throb, a start of pain,  
A sigh, and nothing more.  
(Mazeppa, ll. 783-95)

と描写されているような状態に陥った。死に近づこうとする瞬間、再び息を吹き返し僅かに痙攣するかのようだが、そこでしばらく動きが停止する<sup>10)</sup>。このような生とも死とも区別がつかない状態は、Byronの作品の主人公がしばしば体験し、William H. Marshallはその著 *The Structure of Byron's Major Poems* で、“hysterical paralysis”と表現している<sup>11)</sup>。生と死の間をさながら振り子の如く行き来

するのが特徴である。

## II

Mazeppaでは上述した場面の直後、主人公は“the Cossack maid”(l. 817)により救出され、後日彼はHetmanにまで昇進する。主人公の運命が好転し始めたのだ。The Prisoner of Chillonでも、death-in-lifeの状態のBonnivardに突然変化が生じる(“A light broke in upon my brain,” l. 251)。“the carol of a bird”(l. 252)が牢獄で響いたのである。石造りの牢獄の割れ目からその鳥は入り込んだようで、小鳥のさえずり声により主人公は、

The sweetest song ear ever heard,  
And mine was thankful till my eyes  
Ran over with the glad surprise,  
And they that moment could not see  
I was the mate of misery;  
But then by dull degree came back  
My senses to their wonted track, (ll. 254-60)

と述べるように、喜びの涙を流しそれまでの悲嘆さえ忘れ去ったほどである。だが、同時に彼の感覚を徐々に取戻し正気に返るとともに、牢獄の壁と床が再び厳しい現実として目前に立ちはだかってくるのであった。その小鳥は、

A lovely bird, with azure wings,  
And song that said a thousand things,  
And seem'd to say them all for me!  
I never saw its like before,  
I ne'er shall see its likeness more: (ll. 268-72)

と描写され、翼は碧空のように紺碧であり、幾千もの事柄をさえずり、全てはBonnivardのためにさえずっているかのようなのだ。このような小鳥は今までも今後も見ることはないだろう。牢獄内は、“Dim with a dull imprisoned ray”(l. 30)により色彩のない無味乾燥な光景しか見られなかったのに、突如“azure wings”のカラフルな小鳥が登場したことはたいへん象徴的である。azureは元来、アラブ産のlapis lazuli(青金石)を語源とし、目の覚めるような群青色は宝石や顔料にも用いられてきた。無論、地中海地方の海の青さもしばしばazureという

形容詞で表現される。そのような色彩の羽を持つこの小鳥は、碧空のイメージを生み出し、天からの使者とみなすこともできよう。“pale and livid light” (l. 52) がわずかに差し込む牢内では、azureは極めて色彩的であり、長きにわたり牢獄に幽閉されてきた主人公に生気を与え、彼は“feel and think” (l. 278) することも可能になったと述べる。更に彼はこの小鳥を“in winged guise, /A visitant from Paradise;” (ll. 283-4) とみなすようにさえなり、あたかも弟の魂が天からこの牢獄へ降りてきたかのようであるが、そのために彼の心は死んだ弟への哀悼と再会の喜びにより複雑に揺れ動き、彼は“weep and smile” (l. 286) する。

しかし、とうとうその小鳥は飛び去ってしまい、それが彼を“twice so doubly lone,” (l. 292) の状態に陥らせる。

Lone—as the corse within its shroud,  
Lone—as a solitary cloud,  
A single cloud on a sunny day,  
While all the rest of heaven is clear,  
A frown upon the atmosphere,  
That hath no business to appear  
When skies are blue, and earth is gay.  
(ll. 293-9)

主人公に東の間の希望を与えた、弟の化身のような小鳥が去ったことで、彼は二重に孤独となるが、それを晴天の空に現れた一つのちぎれ雲に喩えている点は興味深い。晴れ渡った天空には、そのような片雲は“frown”のようなものであり甚だ場違いに見える (l. 298)。この部分は、W. Wordsworthのいわゆる“Daffodils”の詩の冒頭、“I wandered lonely as a Cloud/That floats on high o'er Vales and Hills”<sup>12)</sup>を想起させるが、Wordsworthの場合続くstanzaで“A Poet could not but be gay/In such a laughing company:” (ll. 9-10) と述べていることから、おびただしい数のdaffodilsによりこの語り手は愉快になったものと解釈することができる。だが、Bonnivardの孤独感が癒されることはない。

やがて牢獄の看守たちの態度が急遽穏やかになり、それは主人公にとって文字通り“A kind of change” (l. 300) である。“…my broken chain/With links unfasten'd did remain,” (ll. 304-5) と彼が言うように、鎖が外され彼は自由に牢内を歩き回れ

るようになった (ll. 306-9)。無論二人の弟が埋葬されている部分を踏みつけることが無いように、Bonnivardは細心の気配りをしていて (ll. 312-7)。“No child—no sire—no kin had I, /No partner in my misery;” (ll. 324-5) と述べる主人公には今や脱獄する意図は見い出せず、

But I was curious to ascend  
To my barr'd windows, and to bend  
Once more, upon the mountains high,  
The quiet of a loving eye. (ll. 328-31)

と彼が言うように、落ち着いた愛情の眼差しを今一度高い山々へ注ぎたくなつたに過ぎない。牢獄の鉄格子を通して彼が見た山々は、

I saw them—and they were the same,  
They were not changed like me in frame;  
I saw their thousand years of snow  
On high—their wide long lake below,  
And the blue Rhone in fullest flow; (ll. 332-6)

と描写され、以前と全く変化しておらず、万年雪の冠をいただく姿も昔のままである。山々のすそ野には広大なレマン湖が横たわり、ローヌ川がとうとうと流れている。

やおらその時“a little isle” (l. 341) が彼の視野に飛び込んできて彼に微笑みかけるようである (l. 342)。その島は、

A small green isle, it seem'd no more,  
Scarce broader than my dungeon floor,  
But in it there were three tall trees,  
And o'er it blew the mountain breeze,  
And by it there were waters flowing,  
And on it there were young flowers growing,  
Of gentle breath and hue. (ll. 344-50)

と描かれていることから、威圧するように立ちのぼる背後の山々と広大な湖と言うダイナミックなパノラマの中で、彼の牢獄とほぼ同じくらいの小じんまりとした島である。しかし、島の周囲を湖水が絶えず流動し風がそよぎ、新鮮なイメージを与える。この小島には三本の高木が生育しているが、それは牢に幽閉されていた三人とコントラストを成す。

三人のうち二人は既に獄死し、一人取り残された主人公も今や生ける屍のような状態である。他方、“young flowers”がやさしい香気と色彩を放っている小島には3本の高木が生い茂り、生命がみなぎっている。大きさはほぼ同じ程度で、距離的にも遠くはない牢獄と小島、そして牢獄には今や一人となった囚人が繋がれているが、小島の3本の高木は逞しく育っていて生命の息吹を感じさせる。

Wordsworth 作 *The Hart-leap Well* (*Lyrical Ballads* 1800年版所収) に興味深い部分があるので見てみよう。二つの部分から成り立つこの作品の第2部冒頭で語り手は、HawesからRichmondへ向かう途中、路傍の林の中に“Three aspines at three corners of a square,” (l. 103)<sup>13)</sup>を発見し馬を止める。そこには一直線上に並んだ“three pillars” (l. 107)があり、aspinesの木立は枯れて枝も葉も脱落し幹だけが残っている。彼が“Here in old time the hand of man has been.” (l. 112)と述べるように、かつてその場所には人工物が存在した形跡が感じられるが、今は荒廃が著しく春が訪れてくることもないほどだ (ll. 115-6)<sup>14)</sup>。やがて谷間から現れた“Shepherd’s garb” (l. 118)の人物から語り手は事情を聴き、その顛末は第一部で語られている物語と同じである。栄華を誇ったSir Walterが死に、彼の作らせた豪華な四阿も今や荒廃しその場所は完全に死に絶え、異界の魔物さえ出没するという噂も絶えない。やがてその羊飼いは、

But now here’s neither grass nor pleasant shade;  
The sun on drearier hollow never shone:  
So will it be, as I have often said,  
Till trees, and stones, and fountain, all are gone.  
(*Hart-leap Well*, ll. 157-60)  
(underline mine)

と、呪うが如き言葉を投げかける。この引用の最終行でアンダーラインが施されている部分に注目したい。左から順に発音記号で表現すると、[i], [i:], [ou], [au], [ɔ:], [ɔ:]となる。Tillやtreesは高い周波数を含む音であるが、その他は概して低い周波数の音である。周波数の高い音は、即ちいと高い天国のイメージを醸し出し、逆に低い音は地上のイメージと結びつくことは理解できるだろう。要するに天から地へいわば墮落するかのような印象をこの部分は読者に与える。それは、今やすっ

かり荒廃し寂れ果てたこの土地の描写として誠に当を得ている<sup>15)</sup>。

3本の枯れたaspinesは、Chillonの牢獄に幽閉されていた3人の兄弟と呼応し、いずれの場所も目下生気が著しく失せていて死のイメージが支配的となっている。だが、*The Hart-leap Well*の場合、Sir Walterの四阿などの人工物が全て朽ち果てた後、再び自然が辺り一帯を草木で覆い隠してくれることを、語り手は期待していると示唆する (“But Nature, in due course of time, once more/ Shall here put on her beauty and her bloom.” ll. 171-2)。続けて彼は、“But, at the coming of the milder day, / These monuments shall all be overgrown.” (ll. 175-6)と述べ、あたかも自然の浄化力が最終的に勝利するかのようである。つまり、Sir Walterの築いた四阿などの人工物は、やがて朽ち果て周囲に不気味な死のイメージが付きまとっていたのとは反対に、自然は人工物を徹底的に荒廃させ、その結果純粋な自然状態を回復させることで自然を生き返らせるのである。無論この場合、自然には死の否定的なイメージが伴わないどころか、“a deep and reverential care” (l. 167)を抱く深い愛情に満ちた存在に支配された世界と言える。*The Prisoner of Chillon*の湖上の小島も、3本の高木が逞しく育ち、美しい草花が咲き新鮮な風がそよぐ生気に溢れる島である。恐らくこの島には、かつて人間が上陸した形跡は見出せないと思える。その点でこの島は、*Mazepa*に登場する野生馬の生息する世界とも類似している。ここでは、*Mazepa*も死んだ荒馬も、自然をシンボライズしたと思える夥しい数の野生馬に見捨てられた。それはすなわち、死も人間も自然とは相容れないことを意味している。

牢内で鎖を外され辛うじて自由を得たBonnivardは、窓からこの小島を眺め、自身の境遇との著しいコントラストを益々意識し始める。

And then new tears came in my eye,  
And I felt troubled—and would fain  
I had not left my recent chain; (ll. 356-8)

鎖を解かれなかった方が良かったとまで告白する主人公は、“The darkness of my dim abode/Fell on me as a heavy load;” (ll. 360-1)と述べていることから、眩しいばかりの外の光景の刺激が強すぎ、牢内の薄暗さの重圧が益々彼にのしかかってくるかのよ



うだ。彼は長きにわたり獄中生活を続けてきたため、その古巣にすっかり住み馴れてしまい、もはや牢獄から離れることが出来なくなってしまうのだろうか。“And yet my glance, too much opprest, / Had almost need of such a rest.” (ll. 364-5)と述べる彼は、牢獄で癒されることさえ望んでいる。

その後時が経過し、Bonnivardは役人によって釈放されることになる。だが彼は、

It was at length the same to me,  
Fettered or fetterless to be,  
I learn'd to love despair. (ll. 372-4)

と述べ、牢獄に囚われた身分と自由の身分との区別すら感じる事が出来なくなっていた。そして彼のいる牢獄は、彼にとって“A hermitage”(l. 378)となってしまう、その部屋は彼独りのもので彼はいわば一国一城の主である。彼にとって、彼を釈放するために訪れた役人は、その庵の如き彼の住処から彼を無理に追っ払おうとするかのように思えた(II. 379-80)。更に彼は、牢内の“spiders”(l. 381)や“mice”(l. 383)とも親しくなっていたようで、“We were all inmates of one place,” (l. 385)と述べ、あらゆる生き物の頂点に立つべき人間である彼は(l. 386)、クモやネズミを殺そうと思えばいつでも殺せるにもかかわらず、共存する道を選んだようである(“In quiet we had learn'd to dwell,” l. 388)。前述したように、生前狩猟を得意としていた二番目の弟を偲びながら彼は、弟が鹿や狼を追いながら丘を駆け巡っていたと述べる(II. 103-4)。鹿や狼を一日中追いかけ、山野を自由に駆け巡っていた弟とは反対に、目下Bonnivardはクモやネズミという下等動物と同格になるまで成り下がったとは大変アイロニカルである。

今の彼には、冒頭のソネットが示唆するような魂の自由を謳歌する態度は見出すことができない。圧制者に対する自由の闘士としての面目は失われてしまったようだ。彼は、

My very chains and I grew friends,  
So much a long communion tends  
To make us what we are: (ll. 391-3)

と述べるが、クモやネズミのみならず、圧制のシンボルであるchainsとも友人になったと言って憚らない。余りの長きにわたり牢獄に繋がれていたという

事実が彼の人格を破壊し、彼をinertia状態に陥らせたと解釈するべきだろう。

### III

*The Prisoner of Chillon*の主人公が牢に幽閉されることになった理由は、

But this was for my father's faith  
I suffered chains and courted death;  
That father perish'd at the stake  
For tenets he would not forsake; (ll. 11-4)

と述べられているように、父親と同様の信条を抱いていたためだ。彼はその信条を捨てるよりはむしろ、牢内に束縛され処刑されることを望んでいた。歴史上のBonivardは、上述したように愛国的な聖職者であると同時に、当時吹き荒れていたプロテスタントによる宗教改革にも献身的であったようで、そのためにSavoy公の不興を買いChillon城に幽閉された。*The Prisoner of Chillon*の作者は、この史実からインスピレーションを得て、いかなる肉体的束縛をも顧みず、精神的自由をあくまで固持しようとする英雄像を作り上げようとしたに違いない。

当時ByronはShelleyとともにスイスに滞在しており、*The Prisoner of Chillon*はLausanneにほど近いOuchyのホテルで書き上げられた<sup>16)</sup>。同じころ彼の大作*Childe Harold's Pilgrimage* Canto IIIの執筆が続けられていたが、その作品の中で静謐のLeman湖畔に佇む語り手は以下のように述べている。

I live not in myself, but I become  
Portion of that around me; and to me,  
High mountains are a feeling, but the hum  
Of human cities torture: I can see  
Nothing to loathe in nature, save to be  
A link reluctant in a fleshly chain,  
Class'd among creatures, when the soul can flee,  
And with the sky, the peak, the heaving plain  
Of ocean, or the stars, mingle, and not in vain.  
(III, st. 72)<sup>17)</sup>

ここでの語り手は、Leman湖周辺の静寂の中で、自らも周囲の自然と完全に一体化したかのようであ



る。一旦その状態になると、“the hum/Of human cities”も苦痛となり“a fleshly chain”の絆による他のcreaturesと同類であることを厭うようになる。他方、魂は肉体から離れ天空や山頂、波のうねる海洋、星などと自由に混じり合うことができるのだ。続くstanzaで語り手は、“And thus I am absorb'd, and this is life:” (st. 73, l. 1)と述べ、自身が周囲の自然との一体化を遂げたことを宣言する。

だが、*The Prisoner of Chillon*の場合事情は異なる。前述のようにBonnivardはやがて釈放され再び自由の身となるが、その際牢獄を“a hermitage”と述べ、牢内を動き回るクモやネズミさえ同僚の如くみなしていると語る。彼にとって自由を回復することは、もはや不本意である。*Childe Harold's Pilgrimage* Canto IIIの場合、Leman湖周辺の静寂の中で主人公は、たとえ一時的にせよ精神的な高揚を示していたに違いなく、それ故彼は自身が天空や大海原、山頂や星辰などとあたかも一体化したかのよう述べる<sup>18)</sup>。他方、*The Prisoner of Chillon*のBonnivardは、クモやネズミなどという下等動物、更には彼にとって自由を束縛する圧制のシンボルともいえるchainsとも友となったと断言している。この時の主人公には、魂の自由を標榜する不屈の闘士たる毅然とした態度は見当たらない。

ところで、Bonnivardは自身の抱く大義名分のために捕らえられ投獄された。従って、彼には明確な罪の意識はなかった。ここで、S. T. Coleridge作*The Rime of the Ancient Mariner*を取り上げ少し比較してみたい。この作品の主人公の老水夫は、航海中やおら飛来したアホウドリを石弓で撃ち落とし殺してしまう。彼は

And I had done a hellish thing,  
And it would work 'em woe:  
For all averred, I had killed the bird  
That made the breeze to blow. (ll. 91-4)<sup>19)</sup>

と、自分が鳥を殺害したことを認める。しかし他の船員たちは、“'Twas right, . . . such birds to slay, /That bring the fog and mist.” (ll. 101-2)と述べ老水夫の罪を認めようとしな。その後船の周辺は不気味な風の状態が執拗に続き、“The bloody Sun” (l. 112)が照り輝き、飲料水も枯渇し (ll. 121-2)、海水も腐ったようになった (l. 123)。海上には“slimy things” (l. 125)が這い回り、“The death-

fires” (l. 128)が夜空を飛び交う中、撃ち落とされたアホウドリの死骸を、老水夫は十字架のように首にかけた (ll. 141-2)。船は、老水夫の犯した罪の償いとして更に数々の艱難辛苦を体験するが、“Blue, glossy green, and velvet black,” (l. 279)など色彩豊かに水面で蝮局を巻きながら泳ぐ“the water-snakes” (l. 273)が現れたとき彼は、

O happy living things! No tongue  
Their beauty might declare:  
A spring of love gushed from my heart,  
And I blessed them unaware: (ll. 282-5)

と、その余りの美しさに感嘆する。その時、首にかけていたアホウドリの死骸は首から外れ海中に沈んでいった (ll. 287-91)。老水夫がアホウドリ殺害の呪いから解放されたことを、これは象徴的に表している。その後空から聞こえてきた二つの声の一方が、“‘The man hath penance done, /And penance more will do.’” (ll. 408-9)と述べていることから、それは理解できる。この後老水夫は、更なる試練を受けながら航海を続ける。

ともあれ、*The Rime of the Ancient Mariner*では、罪なきアホウドリを殺害したかどで老水夫に呪いが降りかかり、厳しい試練を経て彼の罪が償われると言う図式が中心となっている。これは、Byron作*Mazeppa*に関しても当てはまる。若かりし頃主人公のMazeppaは、とある伯爵夫人Theresaと不倫の恋に陥り、それが発覚したため伯爵の命令によりMazeppaは全裸にされ、荒馬の背中に縛りつけられることになる。荒馬は日夜疾走を続け、馬の背中に縛られた主人公は想像を絶する苦悶によって死も厭わなくなる<sup>20)</sup>。

しかしながら、*The Prisoner of Chillon*では、主人公が犯した罪により彼は牢獄に繋がれ悔悟するという解釈は場違いであり、主人公は単に自身の抱く信念のため圧制者により自由を束縛されていたにすぎない。

## 結び

*The Prisoner of Chillon*の結末で、主人公は看守によって自由の身となることが示唆される。しかし主人公は、“even I/Regain'd my freedom with a sigh.” (ll. 393-4)と、自由を取り戻したことが不本

意であるかのようだ。本稿冒頭で引用したsonnetでは、いかに肉体は束縛されていても、魂の自由は永遠に保障されていることが謳われている。それによって鼓舞された読者は、巻末のこの部分に至り期待を裏切られたと感じるかもしれない。この作品の結末は些かanticlimacticだと言っても過言ではない。この作品が執筆されている当時、Byronと共にスイス国内をツアーしていたP. B. Shelleyの代表作*Prometheus Unbound*では、コーカサスの岩山に久遠の年月鎖で繋がれていたPrometheusがようやく解放されるとともに、自由に満ちた理想的世界の復活が祝祭的に描かれている。だが、Shelleyとは異なりByronの*The Prisoner of Chillon*の場合、あれほど魂の自由を叫び続けた主人公が、最終的には牢獄から解放されることを不本意と思うように心理的な変化を遂げる。極端なまでに自由が束縛された状態が余りの長期間続いたために、彼の人間性が破壊されてしまったと言っても差し支えない<sup>21)</sup>。

本稿は2014年7月12日奈良市春日野荘にて行われた、日本バイロン協会国内談話会の会場にて口頭発表した内容に加筆修正を加えたものである。作品の引用は、英語・英文学論文の慣例によりまた英詩の「音」にも言及している関係上原文のままである。

## 注

- 1) この拙論に先立ち、『『シヨンの囚人』論考ーボニヴァードの心理的变化を辿って』『イギリス・ロマン派研究』No. 13 (イギリス・ロマン派学会, 1989年)で、長きにわたり牢内に幽閉された主人公の精神的ストレスに関して論じている。
- 2) Jerome J. McGann (Ed.), *Lord Byron The Complete Poetical Works* Vol. IV (Oxford: Clarendon Press, 1986).
- 3) Bonnivardのプロフィールに関しては、2)で紹介したテキストのCommentary pp. 449-50に詳しい。
- 4) *The Prisoner of Chillon*におけるBonnivardの兄弟や父親についての記述は全て、信憑性に乏しいと言われている。Byron独自の創作によるところが大きいのだろう。3)で紹介したテキストのCommentary p. 449を参照のこと。
- 5) Jerome J. McGann (Ed.) Vol. V.
- 6) Jerome J. McGann (Ed.) Vol. IV.
- 7) Chillon城は、湖上に顔を出している硬い岩盤を土台として建てられており、その岩盤は城のすぐ沖で一気に数百メートルの深さまで湖中へ落ち込んでいる。実際に潜水艇による学術調査も行われているようだ。詳しくは、Georges Duplain, Magali Koenig (Eds.), *Chillon Step by Step* (Association du Château de Chillon, 1988) pp. 68-9参照のこと。また、Edmond Pidoux, Translated into German by Jean-Raymond Tschumi, *Das Schloss Chillon* (Éditions du Griffon, 1975)にも、Chillon城の沿革やByronに関しての言及が見られる。ところで、The International Byron Societyは、毎年Byronの足跡をたどり、彼にゆかりの土地で国際学会を開いている。1990年夏Lausanneにて学会が行われた際、Chillon城でディナーパーティーがあり、かつてのこの城の城主の末裔がホストとして、往時をしのばせるコスチュームで登場し好評を博した。
- 8) 拙論「『なりすます』登場人物ーByronのBeppoと*The Vision of Judgment*を中心にー」(奈良大学紀要第41号, 2013年)では、Ernest Becker著 *The Denial of Death* に言及しつつ、人間は「死」という抗しがたい現実に対し、それをいわば美化し「死」は決して恐ろしいものではないという虚構を作り上げることで、逆に人生を充実させようと努めようとする。その例として、*Manfred*の最終場面などを引き合いに出し論述しておいた。
- 9) Jerome J. McGann (Ed.) Vol. IV.
- 10) 拙論「ワーズワス『鹿跳びの泉』論考ー鹿の逃走について」(金蘭短期大学研究誌第32号, 2001年)及び「バイロンと『海』ー『ドン・ジュアン』と『マゼッパ』を読む」(千里金蘭大学紀要第40号, 2009年)などで、『マゼッパ』を取り上げ、主人公を背中に縛りつけられた野生馬の疾走と、その後たどり着いた野生馬の世界で生死をさまよいつける主人公について詳しく論じている。
- 11) William H. Marshall, *The Structure of Byron's Major Poems* (University of Pennsylvania Press, 1962). p. 91.
- 12) Jared Curtis (Ed.), *Poems, in Two Volumes, and Other Poems, 1800-1807 by William Wordsworth* (Cornell University Press, 1983).

- 13) James Butler, Karen Green (Eds.), *Lyrical Ballads, and Other Poems, 1797-1800 by William Wordsworth* (Cornell University Press, 1992).
- 14) 拙論「試論－ワーズワスと樹林－『鹿跳びの泉』をめぐって－」(千里金蘭大学紀要第38号, 2007年)では、全くの自然林と人工的な樹林の違いを作品中からかかる部分を引用しつつ詳しく論述した。
- 15) 拙論「*The Solitary Reaper*論考－乙女の歌をめぐって－」(金蘭短期大学研究誌第25号, 1994年)では、Wordsworthの*A slumber Did My Spirit Seal*を取り上げ、類似した論述を行っている。
- 16) Leslie A. Marchand, *Byron A Biography* Vol. II (Alfred Knopf, 1957) p. 632.
- 17) Jerome J. McGann (Ed.) Vol. II.
- 18) 拙論「Byronの*Childe Harold's Pilgrimage* Canto IIIにおける‘静’と‘動」(大阪私立短期大学協会研究報告集第31号, 1994年)では、静謐のレマン湖畔に佇む主人公は、自然との完全な一体化によりしばし忘我状態に陥るが、突如湖上に嵐が生じ雷鳴が轟くことにより、極めて動的な状態に変化する点を、Wordsworthの『嵐のピール城』などの作品と比較している。
- 19) Ernest Hartley Coleridge (Ed.), *Coleridge Poetical Works*, (Oxford University Press, 1980).
- 20) 拙論「Byronの*Mazeppa*における‘馬’の意味」(同志社大学英文学会『主流』第45号, 1984年)でも、荒馬に繋がれ疾走する主人公を、Platoの*Phaedrus*に登場する情念をシンボライズした二頭の馬に言及しつつ論述している。
- 21) Jerome J. McGann, *Fiery Dust* pp. 165-73では、Bonnivardのこのような心理的变化が詳しく論じられている。

